

ナイル・エチオピア地域は、たしかに日本とは地理的にも心理的にも遠い世界にある。近年、さまざまな学問を専攻する日本の研究者が、この地域に数多く入り込んでいるが、その歴史はいっけんとでも浅そうに見える。しかし日本とエチオピア地域との交流史は、日本近代の夜明けにまで起源をさかのぼることができる。青木会員の研究報告は、こうした歴史的関係を明るみに出す貴重な論考である。

明治時代のエチオピア像（2）

青木 澄夫

幣原外務大臣とヴァン・デル・ポスト

後に世界的文豪として著名になるロレンス・ヴァン・デル・ポストと詩人ウィリアム・ブルーマーという二人の『ナタール・アドバイザー』記者たちが、カナダ丸船長森勝衛の計らいで、開設されたばかりの東アフリカ航路第二船で日本を訪問したのは、大正15(1926)年のことだった。

森船長とこの二人の親密な関係については、森の伝記『キャプティン森勝衛 海のもっこす70年』やポストによる回想録『船長のオディッセー』（由良君美訳）、また森の死亡後に刊行された『追悼 森勝衛』などに詳しいが、二人は日本滞在中森の計らいで、時の外務大臣男爵幣原喜重郎に面会する機会を得た。

この会見は、ポストの言によると、「会いに連れていかれた」ものだったというが、外務大臣がわずか20歳と22歳の外国青年に会うのだから、なにか特別な事情が背景にあったのだろう。

遠来の若い客人を前にして、幣原はどこから来たのかとか、国籍はどこかと問いただした。そして、ブルーマーが文学に志していることを耳にしていたのか、「あなたは、第二のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）になられるとか」と尋ねた。するとブルーマーは、「いえ、私は第一のウィリアム・ブルーマーになるつもりです」と、毅然として答えたという。（『船長のオディッセー』以下同様）

ブルーマーについて語られるとき、必ず引用される有名な挿話であるので、ご存知の方も多いと思う。

お世辞を交えて聞いたつもりが、予想外のつれない回答に多少しらけたのか、男爵幣原はポストに質問の矛先を変え、出身地を聞いてきた。ポストが、生まれも育ちも南アフリカで、今はナタールで働いている、と回答すると、男爵は、「喜びのようなものと、かす

かな関心を見せながら、丸顔をほころばせ、『ほほお、そうですか』と、かすかに上品な日本語の齒音をさせながら言うと、英語でつけ加えた。『では、アビシニア（エチオピア）は、よくご存知なわけだ！』

アフリカと聞いて、50以上ある全ての国を普遍化してしまうことは、今でもよく経験することだが、ポストには外務大臣の身である幣原が、何千マイルも離れているエチオピアと南アフリカを同一視しているのが、あまりにあどけなくおかしかった。

ポスト自身は、アビシニアへ行った経験は無かったが、エチオピアの本を読んでおり、アビシニアに詳しい友人もいた。少なくとも幣原よりもアビシニアに関しては知識が豊富だった。

会見は無事終了し、外務大臣が森船長に向かって、お礼の挨拶をするさまを見て、ポストは外務大臣にとって、この会見は有益であったに違いない、と受けとった。

何故なら、「日本帝国のアビシニアに対する、密かな夢と野望にかんする客観的な確証を、この面会があたえてくれた」からだだった。

ポストによれば、この日本の「夢と野望」は、モンバサとナイロビを驚かせ、ムツソリーニを激怒させていた、という。その野望とは、日本がアビシニアを暫定的とはいえ、植民地にしようとする目論みで、言うものだった。それにしても、この国の外務大臣のアビシニアについての知識の無さはどうだ。まるで夢か冒険を語っているのか。

ポストには、この会談が暴走する日本の「夢遊の冒険行の一部」なのかも知れないと映った。

幣原が二人にわざわざ会ったのは、日本政府がエチオピアへの領土的侵略の意図をもってその情報収集のためだったに違いない、とポストは言う。

しかしこれは、果たして真実なのだろうか。

『船長のオディッセー』の原著“Yet Being Someone Other”は、1982年に出版されている。執筆の時期は不明だが、出版年はこの会談から、56年の歳月が流れている。

日本政府が、エチオピアの国情視察に初めて外交官を派遣したのは、ポート・サイド領事の黒木時太郎を大正12年に送ったのが最初だった。その後、大山卯次郎を団長とする7名による大型経済調査団を東アフリカに派遣したのが、昭和2年から3年のこと。

そして昭和6年の外務大臣ヘルイの訪日から昭和10年のイタリアのエチオピア侵略にかけての期間を通じ、エチオピアの名前は、急速に日本で広まっていく。

昭和初期に、一時期に沸騰したエチオピア熱は、イタリアに侵攻されるエチオピアを支援する立場であった。そこには白人勢力から必死に独立を維持しようとするエチオピア国民に対する、日本人の有色人種としての共感があったことは疑いもない。例えそれが一部の人々の思惑にのっかたものであったにしろ。

日本政府は、エチオピアを日本の余剰人口のはけ口としての移住地や、交易の地として考えたことはあった。しかし、そうした考えが発生するのは、ヘルイ外務大臣の訪日後であり、それも民間主導であった。いわんやエチオピアを植民地化したいなどと言う、大それた考えは持っていなかった。

ポストが、幣原から受けた日本のエチオピア侵略構想についての印象は、その後の日本のエチオピアへの支援の状況を見て、後日そのような解釈を取ったのではないかと筆者は見る。

むしろ、外務大臣幣原との会談でポストが受けた「日本のエチオピアへの野望と、外務大臣のアビシニアについてのあどけないほどの知識」のギャップは、それとは全く違う側面から生じたものに違いない。

森船長が、わざわざ外務大臣に二人を会わせようとした思惑は、開設したばかりのアフリカ航路の今後の支援要請のためと、ジャーナリストである二人に南アフリカにおける日本人排斥の状況を語らせ、アフリカ航路開設に際して生じた各種不名誉な問題を、外交の力で何とかして欲しいという、現実的な思いではなかったか。

一方、明治時代に少年時代を送った幣原の頭に描くアフリカとは、学生時代に習ったあの「アビシニアの王子 ラセラス」像であり、アフリカと聞けば即ち、アビシニア（エチオピア）が頭に浮かんだに過ぎない。

い。

第二次世界大戦前においては、外交上アフリカのことが問題にされたことは、コンゴ自由国や後のイタリア・エチオピア戦争など一部の例外を除いてほとんど無く、外務大臣ですらエチオピアと南アフリカの地理的関係を理解することは、期待する方が無理だった。

とというものの、幣原にとってエチオピアと南アフリカを結びつける事になったと思われる資料が全くないわけではない。

満川亀太郎と言う国家主義者が、ポスト達が幣原に出会った大正15(1926)年に出版した『黒人問題』に、次のような文章があるのだ。

満川は、アフリカ人の民族解放運動に触れ、南アフリカではキリスト教が普及して、黒人のなかにも信者が多く、彼らがパンアフリカニズムの宣伝者になっていると説いた後、以下のように述べている。

「たとえば1892年ウエスレヤンと呼ばれる土人によって創立されしエチオピア教会の如きは、即ち夫れである。この教会では、欧人より独立せる阿弗利加基督教会設立の必要を説き、米国より帰来せる黒人宣教師は、世界中からあらゆる黒人間の同盟をなすべき宣伝を行ったから、既に改宗せる黒人信者は白人教会を脱して、この教会に加盟した。土語の新聞紙はこれに猛烈なる声援を与え、イギリス人を海中に駆逐せよとまで唱へ出したので、官憲でも捨てて置かれず、高圧的にこの教会を迫害して、伝道を禁止した。

斯くエチオピア教会は一次屏息したが、一旦黒人の心臓に植付けられた精神は、容易に取り去ることが出来ず、却って欧州大戦を機会として、その基督教の行はる阿弗利加内地に燃揚されたのである。1915年ニヤッサランドに起こりし反乱の如きは全くこの運動の再燃を語るものである。」

たったこれだけの文章であるが、満川は、北一輝、大川周明とともに行地社と言う政治結社を結成し、三尊と称された程の人物であったことから、幣原も本書を読んでいる可能性は極めて高い。

南アフリカとエチオピアは、幣原の頭の中でこのような伏線で結びついていたのではないだろうか。

ついでながら、幣原の兄は東京帝国大学で始めて朝鮮史講座を開設した幣原坦で、後述する「悲劇の將軍」、「カルツームのゴードン」の足跡を訪ねてエチオピアの隣国スーダンを訪れている。明治44(1911)年に行われたこの訪問は、日本人としては2番目で、イギ

リスのスーダン植民地統治を朝鮮支配のために参考にするためだった。(「80年前のスーダン紀行1〜4」(月刊アフリカ)参照)

世界ガイドブックに登場したエチオピア

『月刊アフリカ』に連載した「日本人のアフリカ「発見」」で、明治17年に刊行された『万国名所圖繪 亞弗利加洲』には、アフリカ各地の状景が銅版画をともなって説明されていたことを紹介した。ここでは、エチオピアがどのように紹介されているか、全文をここに掲げよう。

阿比西尼亞國之部 ヌビアカルツームよりマツスア港迄陸路概略五百二十英里

亞比西尼亞はヌビア國・東部東南に在り。南境はガラ、ソマウリ、に隣せり。西南隅は人跡の稀なる内地に連なりて、境界詳らかならず。その紅海の浜辺をば埃及に攻め取られ版図多に減せしも、その幅員の概算は、千七百万英国里、人口僅かに三百万。地勢はおおむね高原にて、海面を抜き八千尺。殊に山脈連亘し、高峰一万六千尺、故に河脈も多くして、ナイルの一派、藍ナイル其の源を山間の大湖水より発するなり。氣候、寒暖大差あり。元來熱帯地方にて赤道直下に接近す。溪間及び海浜は、周歲酷熱堪へ難き。高原の地は温和にて山上甚寒列とす。且つ、毎年六月後九月迄は霖雨あり。その量殊に多くして、あたかも瀑布に異ならず。人家よう戸を皆閉じて、戸外の事業を廢すなり。

産物甚だ多にして、金、銀、宝石、鉄、石炭殊にチグリス地方は平原中に、石塩ありて、地底数尺穿てば、雪白純粹の品質を得ること限りなし。また土壤は膏みにて、年中三回収穫す。然りといえども上虐し、下惰にして、良田も返って荒無の土地となり、森林鬱茂し、草木は榮を競って發生す。故に禽獸又多し。獅子、犀、象、河馬、豹、駱駝、鱈魚、巨蟒は山や野に、しばしば窳息なし居り。蓋し、比の国古代より久しく一強國をなし、戦乱常に絶え間無く、世人称して阿非利加のグレートブリテン国と言う。その名も高く聞こへしが、降って二百余年前、国内大いに分裂し、あまたの小邦國となる。爾來数多の酋長が分かち領して、独立す。その中主なる邦國はチクリ、アムハラ、ソア、サマラ、その他小なる部落とす。

人種は蒙昧野蠻にて文化開けず、暴戾で残酷淫逸俗をなし、奴隸の売買又繁？之を市場の奇貨とせり。且つ人命を軽んずる土芥の如き酋長は生殺与奪の威權あり。

宗旨は、固有の異教あり、一千五百余年前葡萄牙人比國にヤソ教をば伝道す。改信者も又多し。比國政制一として論ずるに足るものなし。

都邑の有名なるものは、サマラ那のマツスア港、人口一万二千あり。之は埃及屬地とす。チクリ那のアドワ府は、人口八千余人あり。隊商多く往来し、貿易上の用地とす。各都市邑の風俗はヌビアと大同小異のみ。故にここに記さず。

悲劇の將軍ゴードンとアビシニア

明治時代に、アフリカに関連したヨーロッパ人で著名だったのは、リビングストン、スタンレー、セシル・ローズ、クルアルガーと並んでゴードン將軍だった。これらの人々の伝記や著作は、戦前においては繰り返し出版されたが、中でもゴードンを描いた徳富健次郎(蘆花)の『ゴルドン將軍傳』は、明治34年に初版を出して以来、版を重ね、昭和15年までに12版を重ねるほどのロングベストセラーとなった。

ゴードンは、中国で太平天国鎮圧のための指揮をとって名声を上げたあと、1872年にエジプト王により、探検家ベーカーの跡を継いでエジプト赤道州知事に任命された。1877年からはスーダン総督となったが、彼の関心はエジプトとエチオピア間の戦争を終結することにあった。しかし、エチオピアの北部を治めるヨハネス4世(ジョン)との交渉は必ずしも上手くはいかなかった。エジプト王はゴードンのやり方に不満を持っていたのか非協力的な関係が続き、ゴードンは1880年にその職を辞している。

その後、南アフリカで軍の指揮を取ったが、1884年にスーダンで発生した大規模なマフディの抵抗は、イギリス政府をしてゴードンをカルツームへ再度赴かせることになった。そして、その一年後、イギリス軍の救援軍到来の直前に「悲劇の將軍」ゴードンは、マフディの剣により52歳の生涯を閉じることになる。

ゴードンは、イギリスの利権を守るために海外各地で戦闘の指揮を取り、また私生活では金銭に極めて淡泊で、厳格で清貧な生涯を送ったとされる。その死を悼んで、ヴィクトリア女王が書簡を遺族に送ったこともよく知られている。

こうした人物が、富国強兵国家を切望する明治の人々心を打たないわけがなかった。

『ゴルドン將軍傳』で、徳富健次郎は、スーダン総督時代のゴードンとエチオピアとの関係をこう描写した。

1877年に、スーダン総督に就任したゴードンには

前に立ちだかるいくつかの問題があった。「幾多の難題は新総督を待ちて横たはりぬ。(一) アビシニアとの葛藤。ゴルドンが赤道州に埋もれ居りし間に、埃及王は英国に蘇士運河株を売りと得たる四百萬ポンドの金を懐にして、アビシニア境のボグスを併せ、更に進むでアビシニアを犯せし為に、アビシニア国王ジョン二世と衝突し、埃及の遠征軍は勇敢なるアビシニア人の為、非常の大敗北をとり、輜重兵は素より、夥しき金貨を棄てて走り、あまりに其の金貨の夥しき為、アビシニア兵は贖貨なるべし思ひ、数十枚の金貨は、一枚の銀貨に換ふる程なりき。埃及王多いに気色を損じ、更に雪辱の軍を出せしも、再び大敗しぬ。ボグス王ワラド・エル・ミカエルは、一たびアビシニアにつき、また翻りて埃及につきたるも、反覆計り難きもあり。比ボグスの処分をつけ、アビシニア国王と敗戦の談判を守備よく行はむは、一朝一夕の勞にあらず。加ふるに埃及軍の大敗は、鼠火の如く蘇丹全州に走りて、土耳其人恐るに足らず、亜刺比亞人の日再び到来せりと云ふ感を爆発させ」ていた。

1877年2月、ゴルドンはアビシニアの問題を解決しようとカイロを發ち、紅海沿經由でマッサワに上陸し、ケレンでボグス王と会見した。ところが、カルツームの西部で不穏な動きがあるとの情報が入った。ゴルドンは、アビシニア王が近隣の「酋長」と戦闘状態にあるため、当分の間エジプトとの交戦の可能性は無かろうと判断し、休戦を約束する書簡を王に送ってカルツームへと向かった。ケレンでゴルドンは、下へも置かない、大変な歓待を受けたと、徳富蘆花は記している。

1878年、アビシニア軍が東スーダンを襲うらしという情報が流れた。この情報は間違っていたが、ボグス王は相変わらず国境付近でごたごたを起しはじめていた。ゴルドンはすぐさまボグスに向かい、王に向かってアビシニア王に謝罪して服従すべしと説いたが王は聞かず、結局月1000ポンドを払う事で言うことを聞かせ、そしてマッサワに到着した。ここでアビシニア王に対して発していた講和条件の返事を待ったが、音沙汰がなかったため、スアキン、バーベルを経てカルツームに帰着した。

その後もゴルドンは、アビシニア領に足を踏み入れている。アビシニア王とは国境問題では行き違いがあったが、お互いに使者を交換しあうなど、「感情の疎通」があったと蘆花は記している。

軍人の鏡とも称されたゴルドンの伝記『ゴルドン將軍傳』は、こうしてスーダんとともにアビシニアにつ

いても僅かながら頁を裂いていた。『アビシニアの王子ラセラス』で育った明治の人々のなかには、サミュエル・ジョンソンの描く桃源郷アビシニアとゴルドンの活躍を重ねて頭に描いた人もいた違いない。

なお、明治12年11月26日付の『東京横浜新聞』は、エジプトとアビシニアとの戦争の和解を次のように報じている。

「十月十八日ケイロ發 埃及トアビシニヤトノ紛争ハ頃ロアビシニヤノジョン王ガ其マソワニ関スル請求ヲ棄タルニ由リ和解セリ」

紙数が尽きたので、イタリアのアビシニア侵略「アドワの大敗北」については、当時の新聞の掲載をもって説明に変えたい。

我々の想像以上にアビシニアは、明治の人には身近であったといえるのではないだろうか。

(あおき すみお
財団法人日本国際協力センター研修監理部)

